

だった。それを帰る時に没収するとは、ソ連に騙されてしまった。

検査も終わり岸壁に連れて行かれた。日本の日の丸の旗が揚げてある。日本の日の丸を久しぶりに見る。胸が熱くなるのを覚える。もう百パーセント日本へ帰れることを感ずる。ソ連のバカヤロー、スターリンのバカヤローと叫びたい。ソ連政府の不信、独裁者スターリンの横暴は終生忘れることはできない。

体重は延吉では七三キロだったが、ナホトカでは四七キロになっていた。

悲しい出来事

福井県 赤坂 忠

農家の長男として生まれ、小学校を終わるのを待つて、春は田畑に冬は藁仕事の手伝いをさせられた。青年時代は戦争が始まっていたので物資が不足していた。欲しがりません勝つまでは。会社に就職したがそ

こには青年学校があり、陸軍少尉、教官がいて一日おきに軍事訓練が行われた。会社の仕事、そして家に帰れば食糧増産に励んでいた。その頃戦争も拡大し、昭和十九（一九四四）年の徴兵検査は一年繰り上げられた。私は甲種合格となり日本国民として名譽であります。友達で早い人は八月に入隊した。私は十月二十日に敦賀の三十六部隊に入隊せよと通知が来た。そして入隊の日、朝早く村のお宮さんに行った。そこには村長さんはじめ、青年団、婦人会、小学生、区民の方々が集まっておられ、武運長久祈願をされ、村長さんの挨拶の中で、お国のため頑張って下さい、留守中は私たちがお守りしますから安心して出征して下さい、とあった。それから歓呼の声に送られ、中部三十六部隊へ向かった。

入隊すると衣服が支給された。そして軍隊の規律等も話された。横におられた古年兵さんが、君たちは満州へ行くのだと言って、何かと親切に教えてくれた。そして二十六日の朝、出発の命令が出た。各中隊は舎外に整列した。一中隊が先頭で駅に向かう途中に三島

橋があり、その橋の上で休憩をした。その時、最後の見送りにと父母があんころ餅を持って来た。食べた食べた、うまかった。あの味は忘れられない。この橋の上より氣比神宮を参拝して駅に向かった。少ない待ち時間で乗車して夜下関に到着したが、船の出港が遅れ翌日出港となった。

そのころ米国の機雷による船没があることを聞き、釜山^{プサン}上陸までは心配だった。やや赤茶色の山々を眺めながら進んで行く。赤い夕日の満州歌の通り真っ赤に燃える太陽を見ながら、北へ北へと進んで行く。窓から外を見ると一面の銀世界であった。

十一月一日、満州の北端瓊瑋の駅に着いた。列車を降りると寒さが身に凍みる。初年兵係の古年兵殿が迎えに来てくれていた。真っ白に凍った路面を歩くと、滑り転げることもあった。各中隊毎に分かれて舎内に入った。案内された位置には藁布団一個と毛布五枚、そして中間の棚の上には三〇センチ×四〇センチの手箱が一個あって、その横に衣類が積むようになっていた。ここが我が生活の起居である。いよいよ軍隊生活

の始まりであった。

誰に聞いたか、古年兵さんや班長さんの世話を初年兵は我先にとするが、それは点数を上げるためだ。また天気の良い時は野外訓練が行なわれた。特に寒い時には鼻の頭が真っ白になる。近くにいる戦友が知らせ、お互いに注意し合う。その頃の給食は高粱^{ポリオン}飯か、半々の大豆飯、時折り米の飯が出ることもあった。

そして厳しい検閲も終わり、部隊の編成替えがあり、今までの親しい友とも別れ、南方方面や沖繩等へ行く者、一部は駐屯地に残るが、大半は二駅の陣地構築に出た。私たちの班は深さ一メートル、幅五〇センチ程の散兵壕を作った。約三カ月程、八月九日は遂に來たるべきものが来た。ソ連との戦争状態に入った。私たちはすぐに二駅の作業を中止、瓊瑋陣地の南丘に配属となる。

九月の十二日頃より戦闘は激しく、北山陣地方面は昼夜を問わず激戦地となった。ここで敵味方ともに多数の戦死者を出した。私たちの陣地の西方二キロメートルくらいかに二站、孫呉へ行く軍用道路、七回りと

称した地点は避けて通れない関所である。ここを敵の戦車がまるで川鱒カワマスが激流に登るように時折一戦車ずつ突進する。そこを三角台陣地（私と同一陣地）より十五榴弾を発射、眼鏡がなくてめくら撃ち。そこで第七中隊から肉迫攻撃隊（決死隊）が出た。出陣したが最後、生きて帰れない肉体はこっぴみじんに吹き飛ば、しかし日本の兵器はこれしかない。ソ連のマンドリン銃は数秒間に七十数発、その銃をソ連兵は皆持っている。日本兵は数人に一銃、それも明治三十年代の一発射つのに数秒かかるもの。

戦争は敗けた。そして武装解除。瓊瑋や二站陣地の兵は孫呉に集結し、千人単位の編成でシベリアに強制抑留となる。私たち若干体の弱い者一個大隊が編成され、ソ連に向かう。黒龍江を渡河しブラゴエシチェンスクの町に行き、赤いレンガの建物、中は土間で薄い敷物が敷いてあった。ここが私たちの収容室だった。翌日から作業の伝達があった。朝まだ暗いが起床がかり朝食をする。昼食分として乾パン二枚をもらって作業に出る。作業は、満州から運んできた米、大豆、

高粱、粟、一袋九〇キログラムもある重いものを一日中船から陸揚げさせられた。

しかしこの仕事は少々のおこぼれがあった。室内に持ち帰り焼いて食べた。さて、この頃、着たきり雀じゃないが洗濯もせず毎日を通ぐすうちに虱が発生し、四〇度余りの熱を出し、一人二人と毎日死んで行く。多い日には十人を超えることもあった。死したら衣服を取り裸にして山積み、三十遺体ほどたまることこへか移動する。私も一度四〇度近い熱を出したが、戦友の手厚い看護で助かった。昭和二十一年の初冬頃、衣類の滅菌処理ができ、また体はシャワーで洗うことができるようになった。

その後、病気ががりの弱兵は、黒河の収容所へ逆送させられた。そして江岸近くの（牡丹江木材倉庫跡地）収容所と南崗収容所（満鉄官舎）に分けられて軟禁の身となった。

ところが六月二十一日夜明け、まず脱走に加わらなかつた何も知らない善良な残留兵（私を含む）の寝込んでいる者を割木で叩き起こし、さらに野外に連れ出

し再度叩き毆られた。毆られた中には老人、婦人そして十歳に満たぬ子供までもいた。

次に将校、下士官、そして消防隊等の五十人を後方の小高い丘まで連行し、両手両足を紐で縛り一列に並べ軽機関銃で射殺した。しかしこの死体の中に奇跡的にも二人が無傷で、互いに紐を噛みほどこき脱出に成功した。今度は夜になると毎日蠟燭の灯で一人ひとりの顔を映し出し、体の丈夫な者や屈強な顔形の者を表に連れ出し、被服を脱がし針金で後ろ手に縛って、五人一組の教珠つなぎにして連行し、黒龍江の激流に銃剣で突き落とす。一夜に二十五人ずつ四日間続いた。表に出され針金で後ろ手に縛られて行く。月の明かりでその姿を監獄の戸板の節穴から代わるがわる覗き見て、ガタガタ震えながら合掌して見送り、明日は我が身かと思うとその震えは止まらなかつた。

しかしここにも二人の奇跡はあつた。突き落とされる瞬間、針金の輪が緩み辛うじて一命を取り止め、一人は飲まず食わず二日がかりで脱走組に合流。あとの一人はこのことを知人に報告に来た。それで前夜のこ

とが分かつた。だがこの人は不幸にも、翌日再度針金組となり今度は帰つて来なかつた。

連日こんな恐怖の日が続くと一日二回の食事ものどを通らず、小便是血流となり、特に女性の生理も止まり、バニック状態となつた。ところが五日目になつて、北安の八路軍司令部より「日本人は絶対殺すな」との朗報が入つた。私を含めて生き延びた男女は、嬉しさの余り互いに抱き合つて一夜を泣き明かした。そして八月十五日北安に向かつて出発した。これが第三梯団であつた。そして九月五日北安に無事到着した。

ここへ来て老若男女たちは帰国の途に着くが、私たちが若い者は再び鶴岡の炭坑に逆送された。この鶴岡炭坑は南山、東山、興山の三つの山があり、私たちは興山の炭坑に行くことになつた。こここの宿舎はバラック建て、中央の通路の両側はオンドルで、その上で寝起きも、また食事もした。

初めは露天掘りの作業だったが、後には地下一〇〇メートルの坑内作業に変わった。私たちの班は田中敏さんが班長で、藤原準一、小林利和、西岡文

男、藤井義昭、角地五平、萩原美広、石井孫三郎、毛利国治氏、外に数人の計十五人だった。

寒い時はオンドルで暖を取り、また久しぶりに白米の飯が食べれるようになった。その頃から我々にも賃金が支給され、食券を買って食堂で自由に食べれるようになった。日曜日等には町に出て地下足袋や衣類等を買に出た。

中国側には日本人はよく働くと評判がよかった。五月一日メーデーには、中国で善良なる労働者の表彰式が行なわれた。その時日本人の代表者として田中敏さんが選出された。

生活が少しずつ楽になった頃、日本人の政治工作員が来て、戦争について、また資本主義について、その他色々の話題が出て、中国の社会は労働者が主人公で政治が行われ、中国と日本は二度と戦争のない平和な社会を作ること誓った。

昭和二十八年八月、中国の塘沽トウコより乗船して、八月十五日舞鶴港に十年ぶりに上陸した。

出征前まで勤務していた会社に、帰国の挨拶かたが

た就職をお願いしたところ、あっさり断られた。実に情けない思いがした。そこで親戚の個人会社に就職しながら農業を営むことにした。現在は農業のみ。

さて、昭和五十七年六月、全国環璣戦友会が福井で行われた。出席者四百六十余人、そのうちの一人増田金網事務局長、自分の同年兵、敦賀市出身、彼よりシベリア慰霊訪問の依頼があった。

ハバロフスク、ブレヤ、ライチハ等の地に眠れる戦友の遺骨採取に参加を抑制者より三人、望月寅雄さん、吉沢捨造さんと私が平成七（一九九五）年七月アムール州のライチハへ行くことになった。厚生省、日本遺族会と十三人が新潟空港を出発しハバロフスクに向かう。ハバロフスクよりは列車にてブレヤ行き、そしてライチハの全部の霊を祖国に迎える。十時頃よりユンボにて発掘開始、あらかた掘って、あとは手掘り、一体一体を丁寧に焼骨して箱に納め、約二週間で百六十六柱を持ち帰り、千鳥が淵の戦没者墓苑に納骨しました。

ここで黒河事件について述べておく。

十数人の将校が極秘に脱走計画を進めていた。まず表門の八人の歩哨を撲殺し、二人でバリケードを（鉄条網）を切断したら一齐に飛び出す。そしてその計画は比較的健康者五百人へのみ知らせ、他の者には知らせなかった。

六月二十一日午前零時、遂に決行した。八人の歩哨を叩き殺し鉄条網の切断も成功した。暗夜に逃げろ、逃げろの絶叫とともに一齐に飛び出した。まず腰までつかる泥濘（湿地帯）を突破しなければならぬ。ところで歩哨の全員を撲殺したはずが一人の歩哨が馬で本隊に急報した。八路軍は直ちに反撃に出た。湿地帯で足を捕らえられている脱走者に銃弾の雨が降った。そのため目的地に到着したのは二百余人、残りの者はいまだに行方不明。また脱走こそ成功したものの、頼りの国民党軍（光復軍）は八路軍に敗北し、その姿さえなかった。それから脱走者は八路軍の追跡に遭い、逃亡避難の憂き目に遭う。表通りや鉄道沿線や民家の近くに出た者は皆、射殺された。そこで大自然の興安嶺の険しい山中を飲まず食わず空腹を凌ぎ、北斗七星

を頼りに内地の肉親そして恋人に一目会いたい一心に、六〇〇キロメートルにも及ぶいはらの道をさ迷い、ある者は夢遊病で発狂し、またある者は栄養失調で野垂れ死に、もはやこれまでと自殺する者等で、最終の目的地に到着したのは僅か三十人程だった。あとの者は消息不明、そしてこの三十人も八路軍によって鶴岡の炭坑に逆送され、哀れにも前者の健康組同様悲劇な運命にたどりついた。

わずか十数人の将校たちの軽率な計画で尊い八百余人が死亡、またはいまだに行方不明。この事件を黒河事件または長坂事件とも言う。

亡くなられた多くの方々の御冥福を心からお祈りして、筆を止めるものである。

【執筆者の紹介】

赤坂氏は一旦シベリアに抑留されたが、弱兵組として黒河に逆送され、鶴岡の炭坑で、八年もの長い間苦難の道を歩まれました。また黒河事件にも、非脱走組慎重派の難民者たちだったが、事件の煽りを受けて相

当苦勞されたと聞きましたので、ぜひそのことを書いていただいたらと無理にお願いして投稿してもらった。

赤坂氏は、昭和五十七年全国瓊瑋福井大会以降、毎年行われる戦友会、そして、瓊瑋三中隊（瓊三会）に一度も欠かず出席してくれています。また全国瓊瑋会事務局長（故）の増田氏とは最大の戦友であったため、氏より依頼あって、シベリア抑留者の遺骨採取には率先して参加されました。

私の末長く信頼する戦友赤坂氏であります。

（富山県 天谷 小之吉）

シベリア抑留六年の足跡

福井県 馬 橋 正

私は、大正十二（一九二三）年六月十五日、福井県の山間部下庄町中荒井で生まれました。下庄小学校に入学し小学三年生まで過ごし、家庭の事情で大野町に

移転し、六年生で卒業し兄の勧めで大阪市港区の菓子店に店員として勤務しました。三年後故郷に帰りましたが、米、砂糖などあらゆる食料が統制になり、世は軍事色が濃くなり統廃業が進み止むなく転々と職場を変え、ついに適齢になり徴兵検査を受ける年齢になりました。幸か不幸か甲種に合格しました。

多くの町民の皆さんに送られて昭和十九（一九四四）年二月、故郷と別れて広島に着き、下関を經由して博多港から玄界灘ヅクワイナの荒波を越えて朝鮮の釜山港プサンポに着き、厳寒の中長い列車の旅で一週間、黒河省瓊瑋駅に到着し、待っていた西村准尉の率いる兵士に引率され四キロ程先の部隊に入隊しました。

その時分は大東亜戦争も終盤に近く、激しい訓練が毎日続きました。そして運命の昭和二十年八月九日、ソ連軍が一方的に侵攻を開始し戦闘となり、戦車を食い止める塹壕掘りが始まり戦闘を交えながらの土方作業を強いられました。私は軽機関銃班だったので機銃を使ってソ軍と戦いました。当時、ソ連の兵士の大半は囚人と幼い少年たちでした。泣き叫ぶ少年たちはか